

利劍即是弥陀号

利劍即是弥陀号、一撃称念罪皆除。微塵故業随智滅、不覺 轉人真如門叫（般舟讚）

寂寥から

「……………打ちたたかれた、あの忘れようとして忘れられない、寂しく悩ましい不安な講習会から帰りまして、私は随分苦しみました。あれだけ疲れているのに、夜になってもどうしても眠られませんか。××寺さんに行ってお話し致そうかと思いましたが、こんな時は矢張り独りで考えていたくつて、只一人悩みつづけました。詳しく申上げなくても先生には私の心持ちは、よくわかって頂けることと存じます。

信仰座談の時先生はおっしゃいました。

『手に持つている刀を捨てよ。而して汝自身を刀にせよ。』と。

あのお言葉が不思議に四五日前にわかつて参りました。何かしら掴えていなければ不安を感じる様な私の信仰、手ばなしで大地に立つことがどうしても出来ない私の信仰であることに気がつきました。あの十日間の講習が何故あんなに悲しく寂しく辛かったのかということも今日になってハッキリわかりました。講習会から帰宅後、二十四日にはじめて×山に出ました。出て見れば、あらゆる人からあらゆる悩みを聞かされ見せられます。それにその人たちは、この人生が生死の苦海であるということも、従つて真実の世界を求めるような真剣な自覚も持つていません。その有様を見ながら悲しみながら、幼稚な私はどうすることも出来ず共に泣くのみで御座います。以前の私でしたら、目の前にこの有様を見せつけられて、しかも、その人たちが真の道を求めようともせず、その問題が一段つくと、再び享樂へ享樂へと、過去の苦惱は夢だった様な顔をして生きているのを見ると、自分の道がほんとうなんだと思いつつ、やはり寂しい気持で一杯でございました。意味は異りましようけれども、芭蕉の『この道やゆく人なしに秋の暮』の句が何かしらうなづける様な気持ちが致します。

今日になつて、悩みばかり与えられたと思つていた講習会が、私をあの愚痴に近い寂寥から救い取つて、念仏の白道こそ宇宙の真唯中を貫き徹る大道だということを信じさせられ、ともすれば浮足になりかけた私をどっしりと立たせて下さったかと思うと形容の出来ない感謝を持たないではいられません。……………後略……………」

以上は一団員の方から頂いたお手紙であります。私は二三度読みかえました。これを読んだ時、何を発見するのでしょうか。

不安

この方は少くともあの幹部講習会に来るまでは、何か持つて、そして、まあま明るい？生活をしていられたらしい様子が見えます。多くの人たちが、あの講習会から楽しかった、嬉しかった、懐しかったと言つて帰られ、中には終生忘れられない一生の新しいスタートであったと喜ばれた人もありましたのに、それとは反対に「打ちたたかれたあの忘れようとして、忘れられない、寂しく悩ましい、不安な講習会」と言つていられます。打ちたたかれた、寂しく、悩ましく、不安なという心的状態は、亡ん

でゆく者の相に、ほかなりません。そして比較的、明るいと思つた世界から、かくも嫌な世界につれこまれたのは、如何にうらまれたとしても私の仕業ではありません。私の講義が縁となつて何かしら亡んでゆく、それを見つめられたにすぎません。

私どもが、自分の考えていることよりも違つた、深い、或は高い世界を聞かされた時、多くの人は耳をつぶろうとします。それは、卑怯な愚かな態度であります。そしてつまらない、今までの生活を自分で許したい心をさえ持っています。それは一度「耳をおおうて鈴を盗む」と言われたやり方であります。心の中に、はつきりとしたものを持つていない人は、その場合、たいがい教や思想に耳をかさないで、足もとから崩れそうでも、何時までも一時の安らかさを持ち続けようとしています。けれどもそれは不安そのものに外なりません。

いまこの方は崩れる世界を見て、不安を感じ、悩みを感じ、寂し量感じられたのであります。

涙の谷底

又一つ別のお手紙を紹介します。

「先生！私は何という不幸な子なのでございましょう。知つていて下さるようには、私には父もありません。母も亡くなりました。そして私は、皆の無理解な人たちの中で生きながらえています。それに、私は全く私の全体を挙げての問題で失望の悩みの谷底に落ちなければならなかつたのです。先生私は何のために生きているのでしょうか。先生私が求めたものは何だつたのでしょうか。もう全てに疲れました……。」²

この方が「全体をあげての問題で失望の悩みの谷底におちた」と言われるのは、前後の関係で失恋であることがわかります。文字通りこの方は、苦悩の谷底に墜ちてをられます。この谷こそ、実に不思議な、魔物を多く生み出す気味の悪い世界なのです。多くの神々や、仏や、運命観、卜占や、祈祷や、幽霊や、一つ目小僧、等々のおぼけはここから生れて出るのです。

「涙がさめさめと流れますわ。」

人生は淋しい所ですわね。

あゝ星よ、おゝ花よ」

こうしたセンチメンタルな甘味な毒酒もここに売られます。阿片の様々な買手がにぎわいます。宗教が時に、芸術が時に、阿片性をつとめるのは、この谷底においてであります。

私どももこうした人生の悲痛な谷底に墜ちた人に同情は致します。しかし再びここで共に、甘味な毒酒を飲んでいようとは思いません。ましてや、しばらくここで御辛抱なさい。じつと泣いていたら、やがて楽しい所へ行けますからと、何時かの楽しみ予仏的行動として、ここでじつと静かにしていることを教えることも出来ません。

悩みに徹せよ

話をもとの方にもどします。この方は、講習会がすんで帰られてからも、まだまだ苦しまれたらしいのです。私は嬉しいことに存じます。悩む者は悩みぬいた方がいいのです。たいがいは行くべき道を行かないで後もどります。それは、あの嫌な谷底には、毒ではあるが人間の好きそうな甘い色々なものが用意されてありますから。あの怪しい幽霊の谷から、人間の智慧の広野につれ出すべき大乘仏教ですが、何時のほどにか、この谷底の妖怪変化の役割におちて来ました。「憂いも辛いも今しばし、辛いであろうが辛抱せよ。苦しかろうがこらえてくれ。息きれ、眼の閉じ次第、花降る浄土へつれ帰り、百味の飲食や、カリヨウビンガの鳥の音や……………」とやられますと、来たるべき日の予行演習をやつてじつと甘酒をのみつつ、永遠に幽霊の一種になつてしまいます。

この方は今、この谷底の酒がほしいのかかわらず、それをすてさせられつつ、悩みぬきはじめました。世の中には、この方とは反対に行詰らないようにあとに帰つてくることを信仰だと思つている人があります。

全てを棄てて

先徳は「ちぎれちぎれ、全てをちぎれ、ちぎろうという思いもちぎれ、ちぎつたと
思う思いもちぎれ」と言われました。

私はこの言葉と同じ意味で、

「汝の手に持つ刀を捨てよ。而して汝自身刀となれ。」

と言つたのであります。さてこの方が苦しいのは、手に持つていたくてたまらない刀を、しかも針のような小さい刀を持ってばとられ、握れば打ちたたかれていることがわからなかつたのです。この小刀を棄てることほど嫌なことは人間にはないので、しかもこれを棄ててすてきつた処に、全我的生活、金剛の信心という、刀それ自体の生活が生れて来るのですに……………。

しかし弱い間はどうしても、何か手物がなくては歩めませぬ。独立した、自由な、明るい歩み等はありません。風が大きく吹いても、何々神、大きな音がしても運命神、空が曇つた位でも祈祷八卦、罵られたら逃げこみ、劍が来そうなら弱腰になり、兎に角、大きな杖や刀を持つことが宗教などと考えたらそれこそ大きな間違いです。

他力の信仰でも、何か手にこれだくと持つことだと思つたら大間違いであります。握ることではなくて手をはなすことなのです。

親鸞聖人の御生活を仰ぎますと、何時も聖人の独特信境は、身に寸鉄を帯びず、藁シビ一本身につけていられないことです。稲田の草庵における弁円との場合でも、或は日蓮上人のふりかざした念仏無間の折伏の太刀風の前にも、聖人には、ただ救われ
てお念仏に生かされる安住があつたばかりでありました。念仏は凡小の小さいはか
らいによつて技巧された刀ではありません。

多くの人は如来に生きようとはせず、如来を手づかみにして、護身用具のように弄ぼうとします。仏凡一体のお救いとは決して、何時までも仏を向こうにばかりながめて、私の方から何かによつて結びつこうとはからうことではありません。「仏、我になりきり給う」、如来は生死のどん底に大悲同感して、全身全霊の上に大信となり大行となつて廻向顕現して下さるのであります。今この方にもこうした味がおわかりになつたのでしょうか。私が信仰座談の時

「手に持つている刀を捨てよ。そして汝自身を刀にせよ。」

と言つたのは、小さい抽象的な技巧をやめて、仏凡一体の大信に生きよとの心持ちを述べたのであります。この方は、

「あのお言葉が不思議に四五日前に、わかつて参りました。何かしら掴えていなければ不安を感じるような、私の信仰、手ばなしで大地に立つことがどうしても出来ないう私の信仰であることに気がつきました。あの十日間の講習が何故あんなに悲しく寂しく辛かつたのかということも今日になつてハッキリわかりました。」と。

真劍にお求めになつたあとがはつきりと残つています。

全我即利劍

如来は本願であり、名号であります。そして大悲本願の具体的表現であるお名号はそのまま「利劍とは即ち是れ弥陀の号なり」と善導が仰せられたように、一切の悪業や障碍を切り開いて下さる利劍であります。

「六道にひく業障の綱をきる劍なりけり弥陀の名号」

とは蓮如さまのお歌でありました。この名号の利劍それ自身と一体に生きたもうた聖人には、ごごかしい玩具にも似た刀を持って振舞いなさることはいらなかつたのであります。

夏の大地に草が劍のように尖つて生きぬいています。彼には、徒らな虚飾もなければ、安値な詠嘆もありません。太陽の恵みのすべてに召喚され、大地の念力に乗托して力そのものに生きぬいております。劍尖のような鋭いその葉の尖に天地の力の一切が躍つています。彼は劍そのものであります。

盡十方無碍光如来の智慧も慈悲も、愚禿の上に輝いて、聖人と一体になりきり給い、聖人は六字名号そのものに生かされきつておられます。随つてその生活の全体が、全身全霊のままが劍そのものと一体であつて、無碍道そのものを生活の中に生きぬかれたのであります。魂のどん底から充されきつていられたのであります。

生活そのものが如来の願行を離れず、我そのまま劍である時、どうして小さい劍がいらしましょう。まことに救われるとは、全我、即ち我の全体を打ちつけて行くことの出きる生活であります。全我即ち劍であります。

二種の劍

無量寿経には

「不可思議兆載永劫に於いて菩薩の無量の徳行を積植し、欲覚、瞋覚、害覚を生ぜず、欲想、瞋想、害想を起さず。」

とあります。これは、法蔵菩薩の永劫の徳行を示された一節であります。誠に凡夫は、欲覚、害覚、瞋覚それ自身であります。稲田の草庵におしよせた弁円は、聖人が稲田にお住いなるようになってから、山伏の修験道に対する帰依者が少くなつて、人と物とが集まらなくなつたために、その欲心は恐ろしくかま首をもちあげました。欲覚、欲想それはひいて浅間しい瞋恚の炎として燃えあがり、瞋覚、瞋想、更に聖人やつつけようとする害心が彼を動かしたのであります。（害覚、害想）彼は遂に欲覚、瞋覚、害覚そのものであり、欲想、瞋想、害想そのものであります。この煩惱でつくられた剣が弁円の全体でありました。

しかし聖人は、丸腰のまま、お念仏申されつつ、恐るべき弁円の前に立ちになりました。そして聖人は、弁円よりも遂に強かつた。戦わずして弁円は折られ合掌の中から新に念仏の子、明法房が生まれました。何が勝つたのでしょうか。

如来名号の利剣は、赤き純粹の真実、至心、信樂、欲生と、永劫に鍛練せられ、「欲覚、害覚、瞋覚を生ぜず」と磨かれたる、無碍の名剣であります。一度揮えば一切の魔軍を亡ぼし、迷妄を切りはらい、業障を断滅する正宗であります。聖人はげに、その正宗それ自身でありました。

我等は真に一切の無明のはからいを棄てて、この無碍道に救われるべきであります。

「今日になつて悩みばかり与えられたと思つていた講習会が私をあゝの愚痴に近い寂寥から救い取つて下され、念仏の白道こそ宇宙の真唯中を貫き徹る大道だと知らしめられ、ともすれば浮足になりかけた私をドツシリと立たたせて下さつたことを思うと形容の言葉もないほどの勿体なさ有難さで御座います。」

これは救われたこの方の喜びでありました。

往き易くして人なし

この方はそうした心で、はじめて街に出ました。

「出て見れば、あらゆる人から、あらゆる悩みを聞かされ、見せられます。しかもその人たちは『人生が生死の苦海である』ことに目醒めて居りません。従つて真実の世界を求める様な気も持つて居りません。」この方はその人たちの上に悲嘆していられます。そして「その人たちが道を求めようとせず、その問題が一段落つくと再び享樂へ享樂へと過去の苦惱は夢だつた様な顔をして生きているのを見る」とたまたまなく寂しくなつて、芭蕉の「この道や行く人なしに秋の暮」の句を思い出していられます。蓋しこれがこの方お一人の悲しみでしょうか。釈尊は「往き易くして人なし」と悲しまれました。

私は再びあの嫌な涙の谷底を思います。一切の悪魔や、お化けや、幽霊が生れ出る谷底を。

誰だつてあの谷底におちます。しかしここで私どもは幽霊になつたり或は毒酒に麻痺したりしてはなりません。おそろしい苦の逃避、或は魂をしびらす享樂、そんな一切をはらひのけて、苦の中に苦を超える力に蘇らねばなりません。ここに私を救いあげる、大行が生れます。ほんとの生活者が誕生します。真人生も、真の信念も亦ここから生れます。

この嫌な谷底へ如来の智慧光が輝き入り、本願力が動きはじめ、念仏が生れます時、本格的な大信大行の力強い生活が生れます。

一切の幽霊魔群が、智慧光の前に屍となつて、輝かしい必定の菩薩が一切を背負つて、何ものにも碍げられない、無上正真の大道を歩みはじめます。彼は利劍それ自体であります。彼には、はじめて如来が何であるかが明かにわかります。